2012年（平成24年）10月5日（金曜日）

日本経済新聞

間伐材で火力発電

グリーン発電大分 林業にも寄与

大分・日田

再生可能エネルギー開発のグリーン発電大分（大分県日田市、森山政美社長）は、間伐材など未利用材を燃料に使う木質バイオマス発電所を日田市に建設する。来月に着工、来年11月に操業を始め、九州電力に売電する予定。建築廃材ではなく、地元の林業事業者から未利用材を購入するため、林業再生につながると期待される。

林野庁によると、間伐材が中心のバイオマス発電は、福島県会津若松市で7月に稼働した発電所に次いで国内で2番目になる見通し。

発電所の出力は5700キロワット。所内で自家消費する分を除き、5千キロワットを売電する。発電所は1日24時間稼働し、年間の発電量は約4千万キロワット時になる。建設費は19億6700万円で、うち8億円を補助金で賄う。

燃料に使うチップの加工設備は、木質燃料製造の日本フォレスト（日田市）が発電所に隣接して設置。半径50キロ圏内から未利用材を調達する。チップの使用量は年間約6万トン（原木換算で約10万立方メートル）を見込む。チップ原料の調達費は年間4億～5億円とみられる。

これまでの木質バイオマス発電は主に建築廃材を燃料にしていた。未利用材を使うバイオマス発電では、山に放置されていた間伐材に新たな需要が生まれるため、林業での雇用確保や森林整備につながる。

森山社長は、発電所や燃料加工場で約20人の新規雇用を見込むほか、未利用材の集荷や運搬など林業関連で約60人の雇用が生まれるとみている。

グリーン発電大分は日本フォレストを経営する森山氏が木質バイオマス発電を手掛けるため、2010年に設立した。